

鷲谷七菜子

古都残照



古都残照

鷺谷七菜子

牧羊社

こ と ぎ ん し ょ う
古都残照

昭和六十二年十月五日 発行

著 者 鷺谷七葉子◎

発行人 川島壽美子

発行所 牧 羊 社

東京都渋谷区渋谷二丁目十二の十二

電話 〇三(四〇〇)一六一四

振替 東京 九一九〇二〇二

印刷 三協美術印刷株式会社

製本 松栄堂製本所

定価 一、四〇〇円

ISBN4-8333-0089-3

古都殘照・目次

枯	時	紫	雲	釣	藤	曳	花	京	淀	雪
						山			川	の
山		陽	ヶ			ま	と		の	延
						つ			枯	暦
水	鳥	花	畑	狐		り	舞	扇	芦	寺

121	115	109	95	79	73	59	43	33	21	7
-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	---

あ と が き	鹿 ヶ 谷 の 除 夜	事 始 め	未 来 へ の い ざ な い	竹 の 影	尾 上 の 残 照	あ だ し 野	安 曇 川	河 鹿	妻 恋 い の 杖
------------------	----------------------------	-------------	--------------------------------------	-------------	-----------------------	------------------	-------------	--------	-----------------------

237	225	211	197	185	171	159	139	133	145
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

装幀・巖谷 純介

古
都
殘
照

雪の延暦寺

根本中堂

私は一月という言葉が好きである。新年とか正月とかいう言葉とはちがって、一月という言葉には、単に年が改まるといった感覚よりも、すべてがこれから始まるというような、何か原始的なひびきをもっているように私には思われるからだ。

はなやかな正月気分が終って寒に入ると凍るような静けさが訪れるが、そうした中で、自然はいよいよよきびしい相をあらわしはじめる。しんまで凍てついたようにつつ立っている巖や、落下する水の、激しい勢いの姿を見せたまま氷りついている滝、あるいは一夜の雪に、みるみる聖地のような相貌への変化を見せる山野や村里など、比較的温暖な地方といわれる関西でも、一月の自然は美しさの中にも、太古につながるようなきびしさと静寂の姿を見せ

る。何かが生まれる以前の、まだその胎動さえ感じられぬような不思議な静けさ、そうした自然の中に身を置くことが、なぜか私には懐しくさえあるのだ。

人間はもとより、すべての生物がこの世にあらわれる以前の大きな静寂。そうしたものに通じる静けさを、一月の自然は秘めているのではないだろうかという思いがしきりに心を捉えて、私はよく一人で、きびしい寒さの山をたずねる。

年末からいくたびも降っては消え、消えては降り、そうして積った雪が氷りついた比叡山の参道を、今私は一步一步踏みしめながら、びりびりした寒気の中で、自分自身が透明化してゆくような心地よさを味わっていた。

京の町は晴れていても、比叡の冬は、いつも時雨か雪に見舞われる。さきほどからははらと降りかかっていた時雨がまた雪となり、宿坊へ着いたときにはひとしきりの飛雪となっていたが、夜、窓ガラスに顔を近づけて外を見ると、いつの間にか雪はやんでいて、遠く大津の町の灯が宝石のようにきらめいていた。

比叡山という山は、京、大阪に住む者にとっては親しい山で、私も昔からいくたびか訪れたが、延暦寺の根本中堂に魅せられるようになったのは、そんなに古いことではない。

昔から仏教思想に関心をもっていた私は、ちょうどその頃、「摩訶止観」の一念三千論に深く感動していた。

天台智顗ちぎの世界観の結集といわれるこの思想は、一念（極微の世界）と、三千（極大の世界）とは渾然一体となっている、ひらたく言えば、ミクロとマクロの合一の思想と聞く。

宇宙の力が一存在にみなぎり、一存在の力が宇宙と一つになるというこの考え方は、当時、たえず根源的なものへの問いかけをつづけていた私の心の中に深く定着し、それ以来私の足は、事あるごとにこの山に向くようになったのである。

宿坊で一夜を明した翌朝、暁闇の中でとび起きて根本中堂へ向い、真つくらな堂内に入ると、朝の勤行のはじまる前の静けさが、凍てのきびしさと共に、じいんと身体に沁みこんでくる。ただひとところ薙を上げたその空間から、雪の朝の白みはじめた光が外陣にさし込んでいた。

くらがりの中で常夜燈が三つ、常住不断と云われるこのともし火は、天正十三年立石寺から伝えられ、今日まで消えることなく受けつがれているという。

その向うに一对の大きな蠟燭の焰がゆらめいて、何やら金色の裳裾のようなものが照し出

されているのは、本尊の薬師如来と脇士の日光、月光菩薩であろうか。上半身は闇にかくれて、ようやく暗さに馴れてきた目を凝らしてみても、お顔を拝むことは出来ない。

日常次元を遠く距てたこの神秘の世界に、たった一人で合掌し蹲っていると、なぜかそのくらがり、途方もなく大きい宇宙の闇に通じているような気がしてくるのは不思議であった。ちらちらと灯明りに見える如来の金色の裳裾が、ふと宇宙の遙か彼方にきらめく遠さを感じられ、それでいて自分のこの手に、今すぐにも触れようと思えば触れられる近さとも思えた。そうした闇に、生き身の自分のいることが夢のようであった。

僧たちの姿が、影のように内陣に入ってきた。午前七時、朝の勤行がはじまる。

天台様式といわれる作りの、外陣よりぐんと低い内陣に居ならぶ僧の姿は、私の位置からは見えない。一段高く座を占めた導師の姿だけが仄かに浮び、低く、ずっしりと沁みわたるような読経がつづく。

この延暦寺千二百年の法燈の下、ときには僧兵の蹶起、あるいは信長の焼打ちなど哀しい歴史も残しはしたが、しかし古くは平安朝の恵心僧都、降って法然、親鸞、道元、栄西、日蓮など、鎌倉期の名僧を次々と輩出した、この広大な天台思想が今の世に受けつがれ、そし

て又、次の世に譲られようとしているのである。

この山の有名な行に、千日回峯行というものがある。

七年間に亘って千日の回峯をするのだが、一日に三十キロの回峯をつづけ、五年目に七百日目がすむと直ちに堂入りをする。そして九日の間、断食、断水、不眠、不臥の参籠を遂げて、六年目からは回峯の他に、京都への往復が加わって一日六十キロ、八百一日目からは一日八十四キロとなり、これが終って大行満となる。

天正年間から今日まで、この大行満を果した人は三十八人と云うが、この超人的な、生死の間をさまよう行の中で、その僧たちの垣間見た世界はどのようなものであったろうか。

勤行が終って、僧たちは又影のように外へ出ていった。その影の姿に曳きずられるように、私も外へ出た。

凍りつくような朝の空気の中で、雪の敷きつめた杉の間の参道を、「おう、おう」と声を引きながら帰ってゆく僧たちの後ろ姿が見えた。

老杉の秀に花を咲かせたように積っている雪が、今きらきらかがやいているのは、厚く沈んだ雲のどこからか朝日がのぞいているのであろうか。

参道の木立の少し展けたあたりへ出ると、不意にぱっと明るい、しろがねの光があった。ゆうべ宿坊の窓に、宝石のような灯をちりばめていた大津の町も、朝の湖のしろがねの光の中では、姿をひそめているようであった。

遠く平安の昔、若き日の最澄が、金剛不壊の大願に燃えてこの堂を創建、一乗止観院と名づけて常行三昧に明け暮れたとき、朝の琵琶湖のしろがねの光は、大願成就を幸う兆しの光としてその瞳に映ったことであらう。

そして今この湖光は、あの根本中堂の神秘の闇から出てきた私の瞳に、大きく息づく自然の生命の光として映っている。その自然の生命の息づきの姿こそ永劫の美しさであり、それをこそ、あるいは仏というのではあるまいか。

朝日に溶ける杉の秀の雪しずくが、散華のようになきらめきで散っていた。

奥比叡 横川

暗い、と思ったのは、杉木立のせいばかりではなかった。一度顔をのぞかせた朝日も、又すっかり雪雲に蔽いかくされたのであろう。ときどき顔にちらついていた粉雪が、にわかに乱舞しはじめた。

冬なお青青とした杉の秀が、今は狂うばかりの飛雪にけぶって、一本一本の幹が、しょうこともなく立ちすくんでいるようである。

飛雪にくらむ杉谷の坂道は、あるいはゆるやかな登りとなり、あるいは思わぬ急な下りとなつて続く。

山王院を過ぎて、うすぐらい石段の道を下ってゆくと、透明な微光をまとうかのように、寺の屋根が低く沈んで見える。浄土院である。簾目の美しい砂の庭は侵しがたいような清浄さで広がり、最澄の遺骸の眠る場所として、いかにもふさわしい。